

日本人の特殊ながん事情

目白大学 名誉教授

林 俊 郎

1. ルーメン細菌から人類進化の谷間

1) 天網恢恢疎にして漏らさず

発酵の専門誌に門外漢の私が寄稿するに至った動機について少し説明しておきたい。私のささやかな研究歴を取って三期に分けると、前期がルーメン細菌、中期が社会問題、後期が人類進化ということになる。これらは一見して何の脈絡もないように思われるが、その根底にはすべてルーメン研究の思想が一貫している。ルーメン細菌とは反芻動物の第一位（ルーメン）に棲息する細菌のことで、嫌気性の赤い色をした乳酸菌（*Streptococcus bovis*）の糖代謝が私の主な研究テーマであった。放射性同位元素の C^{14} でラベルしたグルコースや CO_2 を用いて代謝産物を追跡した後、酵素実験で代謝機構の裏付けをとった。初めて投稿した報文に対して24か国250人を超える研究者から別刷り請求や問い合わせがあり、当時のルーメン細菌研究に対する関心の高さと海外の研究者の真摯な姿勢に身が引き締まる思いをしたものである。日本人の研究者からはほとんど反応がなかったが、ただ一人、東京女子医大の吉岡守正氏（故人）より論文を出す度に「林 T. 様」という宛名書きで別刷りの請求があった。そして、その後まもなくして医学書専門の廣川書店から吉岡氏らを編集者とする『レンサ球菌感染症』全3巻の最終巻の巻末に応用編として医学者でもない農学出身の若僧の私に執筆の依頼があったが、この時になって初めて同氏がこの女子医大の学長であることを知った。まさに天網恢恢の世界である。

また、本来のテーマとは別にルーメン研究に絡ん



でリグニンを分解する白色腐朽菌を活用した当時大量に発生していた農産廃棄物の稲わらの飼料化を柱とする「循環複合農法」を考案して群馬県の嬭恋高原でテストプラントを立ち上げた。この当時はオリジナルカロリーベースから日本の食料自給率の悲惨な実態が露見、地球レベルの異常気象により旧ソ連の秋蒔き小麦が全滅して国際穀物相場が暴騰した他、エルニーニョ現象

でペルー沖のアンチョビ漁が壊滅して米国産大豆の日本向け輸出が全面禁輸になり大豆加工業者はむしろ旗を立てて国会に押し寄せた。また、天明の飢饉並みの冷夏により青森・岩手の米作が全滅するなど、今では信じられないが真剣に氷河期到来が議論された。このような時代背景もあってこの農法は週間ダイヤモンド誌の表紙に「これが80年型生産革命だ」を掲げて特集記事で紹介された。いずれも40年以上も昔の生涯で最も希望にあふれた若い頃のことである。

2) スケープゴートにされてきた食品業界

中期の社会問題では、日本人のがん、乳児硝酸中毒、エイズパニック、ダイオキシン・環境ホルモン騒動、狂牛病騒動、ダイオキシンによるウクライナ大統領候補毒殺未遂事件、口蹄疫騒動、鳥インフルエンザ騒動、新型インフルエンザ騒動、福島原発事故放射線風評被害、コロナ騒動、ウクライナ戦争など国内問題だけでなく直近の国際問題にも学会や書籍で持論を展開してきた。ダイオキシン問題では、超党派議員連盟の要請を受けて衆議院会館で講演し、ダイオキシン法の早期廃止を訴えた。

後期の人類進化もまたルーメン研究からの着想で